

# 第1回 同志社ゼミ

2000年 4月26日(木) 3講時

指導院生 小野 景子

チーフ：小池 政輝，サブチーフ：村上 美緒，西村 晶子

## Doshisha Seminer の目的

同志社大学に通いながらも同志社の歴史や創設者である新島襄について知識が少ない内に卒業する学生が多い。この事は非常に残念なことである。三木研究室ではこのような事が生じないように、同志社ゼミを催し同志社の歴史や College Song をマスターする事を通して同志社の伝統を理解し、母校への愛着を持ち、社会に出ても同志社人としての誇りを糧にして社会で活躍することを目的とする。

## 同志社徽章

正三角形を3つ寄せたマークは、国あるいは土を意味するアッシリア文字「ムツウ」<sup>1</sup>を図案化したものである。考案者の湯浅半月は、本学が生んだ詩人であり古代オリエント学者である。制定された当時、半月は本学の神学教授であった。制定以来、知・徳・体の三位一体あるいは調和を目指す本学教育の理想を表すものと解釈されている。(Fig.1 参照)

制定年月 1893年10月

デザイン 湯浅吉郎 半月



Fig. 1 同志社徽章

## スクール・カラー

スクール・カラーは Purple & White(紫と白)の2色である。紫はローヤル・パープルで日本の古代紫と江戸紫の中間色に相当する。創立者新島襄が学んだ米国アーモスト大学のスクール・カラーと同色である。社旗は、地を紫に、徽章を白でぬく。

## 人間 - 新島襄の姿

「人間の偉大さは彼の学問によるものではなく、自分が公平無私になること (disinterestedness) にあるのだ。」

この言葉が示すように、校祖新島襄 (Fig.2 参照) は、学問の目的が単なる知識の吸収にではなく、「人を思う心をつくる」ことに在ると説いた人であった。キリスト教の精神を基に人間尊重を説く「知徳並行教育」を強調した。知識のみに片寄せた教育を受けたものは、己の名誉欲や利害だけで働く利己的な人間になりがちだ、と新島は考えた。他人の不幸や迷惑を顧みないのである。キリスト教の教えに基づく徳育を新島が強調したのは、知識教育の片寄りを正すためであった。

京都の今出川に同志社英字校を創設した時、新島襄の精神的支柱となっていたものは、常に世界に目を配る国際主義と民主主義、そして「愛の宗教」と呼ばれるキリスト教の教えであった。



Fig. 2 校祖 新島 襄

<sup>1</sup>アッシリアはメソポタミアの肥沃な三日月地帯にあり、古代においては最も文明の進んだ地域だった。

## カレッジソング

Doshisha College Song は、1908年の作で、作詞者は当時近江八幡で自給伝導していた26歳の青年 William M.Vories である。William M.Vories 氏は、後年門人などと共に「近江兄弟社」を結社して湖国に自給伝導を続けた。作詞の構想について「…同志社の性格はその名のとおりに One Purpose です。そこに詩想の根拠を置いて書きつけました…」と語っている。(Fig.3 参照)

### Doshisha College Song

1.  
One purpose, Doshisha, the name  
Doth signify one lofty aim;  
To train thy sons in heart and hand  
To live for God and Native Land.  
Dear Slma Mater, sons of thine  
Shall be as branches to the vine;  
Tho' through the world we wander far and wide,  
Still in our hearts thy precepts shall abide!

#### 和訳

1.  
同志社よ、その名は一つの目的を意味する。  
その学徒の精神的、肉体的に神のため、祖国のため、  
生きんとする一つの崇高な目的を、  
親愛なる母校よ、同志社の学徒は、  
葡萄の枝のごとくつながりゆくことであろう。  
たとえ世界くまなく、広くはるかに、我らさ迷うとも  
汝の教訓は、我々の心に永遠に生き続けるであろう。

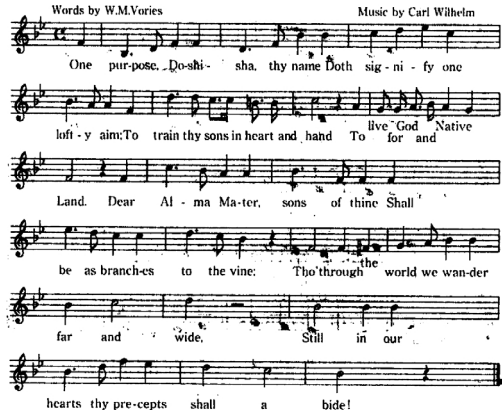
2.  
We came to Doshisha to find  
The broader culture of the mind;  
We tarried here to learn anew  
The value of a purpose true;  
Dear Alma Mater,ours the part  
To face the future staunch of heart,  
Since thou hast taught us with high aim to stand  
For God,for Doshisha,and Native Land!

3.  
When war clouds bring their dark alarms,  
Ten thousand patriots rush to arms,  
But we would through long years of peace  
Our Country's name and fame increace.  
Dear Alma Mater,sons of thine  
Will hold their lives a trust divine  
Steadfast in purpose we will ever stand  
For God,for Doshisha,and Native Land!

4.  
Still broader than our land of birth,  
We've learned the oneness of our Earth;  
Still higher than self-love we find  
The love and service of mankind.  
Dear Alma Mater,sons of thine  
Would strive to live the life divine;  
That we may with increasing years have stood  
For God,for Doshisha,and Brotherhood!

Doshisha College Song

Words by W.M.Vories      Music by Carl Wilhelm



One pur-pose, Do-shi-sha, thy name Doth sig-ni-fy one  
loft-y aim;To train thy sons in heart and hand To live for and  
Native Land. Dear Al-ma Ma-ter, sons of thine Shall  
be as branch-es to the vine. Tho' through the world we wan-der  
far and wide, Still in our  
hearts thy pre-cepts shall a-bide!

Fig. 3 Doshisha College Song

One purpose, Doshisha, thy name  
ワン パーパス ドーシーシャ ザイ ネーム  
Doth signify one lofty aim;  
ダース シーグニーファーイ ワン ローフティ エイム  
To train thy sons in heart and hand  
トゥー トレーン ザイ ソンズ イン ハーテン ハーン  
To live for God and Native Land.  
トゥ リー ファ ガッテンネーイーティーブ ラーン  
Dear Slma Mater, sons of thine  
ディーア アールマ マーター サーンズ オブ ザイン  
Shall be as branches to the vine;  
シャル ビー アズ ブランチェース トゥー ザ ヴァーイン  
Tho' through the world we wander far and wide,  
ゾー スルー ザー ワーディ ワンダー ファー エーン ワーイ  
Still in our hearts thy precepts shall abide!  
スティール イン ナーワ ハーツ ザイ プリーシェプツ シャールアーバーイ

## 新島の足跡

1843年1月14日

女児が4人続いた後の待望の嫡男として、父 民治、母 とみのあいだに生まれる。祖父の弁治が思わず「しめた！」と膝を打ったことから「七五三太(しめた)」と名付けられた。その後、七五三太はわんぱくな幼少期を過ごす。

1853年

黒船来航。この後いくつかの外国船が日本を訪れ、新島も海外の様子に強い関心を抱くようになる。

1856年

田島順輔の手ほどきで蘭学を学び始める。このほか、漢学、数学、航海学なども学ぶ。

1864年

蘭学等を海外で学ぶために、脱藩して函館に行く。また、この年、英国商人ポーターの商店に勤めていた福士卯之吉の斡旋によってアメリカ商船ベルリン号に乗り、脱国を企てる。上海に着いた船は、そこで日本に引き返さなければならなかったが、ベルリン号の親切な船長のはからいでワイルド・ローバー号に乗り換えることに成功。新しい船で七五三太は Joe と呼ばれ(これがのちの襄となる)、やがて船はボストンに入港する。

脱国を企て丸1年で、新島は着実に封建体制下の青年武士から近代的な1人の青年に脱皮を遂げていた。

1865年

ボストンではワイルドローバー号のテイラー船長の紹介で船主のハーディー夫妻の世話になる。それからの9年間でフィリップス高校、アーモスト大学、アンドーヴァー神学校の3つの名門校をいずれも成績優秀で卒業した。1868年、明治維新

1872年

アンドーヴァー神学校卒業前、新島はワシントンで岩倉全権使節団に会う。副使の木戸孝充らと親交を結び、使節団の要請にこたえて当時の文部理事官の通訳兼案内者を務める。

1874年

ヴァーモント州ラットランドで開催中のアメリカンボードで挨拶し、日本にキリスト教主義の学校設立のための寄付を募った。アピールは反響を呼び、その場で約5000ドルの申し出を得た。同年、31歳になった新島は帰国する。

1875年

京都にキリスト教と近代科学を教える学校を作るという考えを提案し、宣教師グリーンとJ・D・デイヴィス、京都府顧問の山本覚馬に支持を受ける。そこで、新島は山本所有の相国寺門前の旧薩摩藩邸跡地を譲り受ける。その地に、この年の11月29日同志社英学校を設立した。教員は新島とデイヴィス、生徒は8人というスタートだった。しかし、正課の授業で聖書は教えないという条件のもとで京都府に許されたものだった。

また、この年、山本八重と婚約。

1883年

同志社大学設立の活動をはじめた。新島襄は私立大学を「人民の手に抛って設立」することを考えたからである。当時大学と呼ばれるものは、官立の東京大学一校のみだった。これに抗して、全国の賛同する民間人の手によって、つまり自発的結社という新しい「志を同じくする個人の約束による結社」という名前自体この理念を示している。

1890年1月23日

同志社大学設立半ばで永眠する。

## 同志社大学の中の格言集

- "My Life is My Message" (私の生涯が私の遺言です)  
新島と共に同志社をつくった人J. D. デイビスの言葉で、田辺校地のデイビス記念館のロビーに刻まれている。
- 「良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起り来ラン事ヲ」  
新島襄の刻んだメッセージ。キャンパスの正門を入ったところにある同志社の大学教育のシンボルとなる石碑。

- ”Learn to Live and Live to Learn” ( 生きるために学ぼう、そして学ぶために生きよう )  
初代学長をつとめた D. W ラーネットの愛誦句。ラーネット記念図書館の正面玄関上に刻まれた。
- ”SEEK THROUGH YOUR VOCATION TO SERVE GOD AND HUMANITY” ( 天職による神と人類への献身 ) 理化学館の正面玄関上に刻まれている J. N. ハリスの言葉。
- 「平和、喜び、天国」  
1月23日午後2時20分、新島はこの言葉をつぶやきながら眠りについた。

## 自責の杖

礼拝の席に生徒が集団欠席した校則違反に対し、責任は校長の自分にあると言い、杖が折れるまで自分の腕をたたいたという新島の「自責の杖」。この事件は日本で最初の学生ストライキである。新島の、キリスト者、牧師、そして教育者としての姿を、同志社教育のあり方、またその本質を、最も象徴的に表した事件として、同志社はこの出来事を永く語り継いで記念している。

「自責の杖」事件の遠因は、78(明治11)年に入学した生徒数が少なかったため、翌年1月、生徒の再募集をしたことにあった。正規の新入生と、あとから入学してきた者とは、学年が違って別なクラスであった。このまあいけば問題はなかったのだが、経営と教務上の判断から、この2クラスを校長の新島不在のまままで合併したことに端を発した。上級生になっていた2年生の生徒にとっては当然、面白くない。この中に徳富健次郎(蘆花)がいたが、この2年生の不満をさらに5年生があたりたてた。そしてこれがついに生徒のストライキ、無断授業放棄、ということになったのである。伝道旅行から帰ってきた新島は、対策に苦慮した。学校の規則上、授業放棄を放置するわけにもいかず、他方、教務上にも問題があり、これがついに「自責の杖」事件となった。80(明治13)年4月13日、朝礼の時に、新島は生徒を罰するのではなく教師を罰するのではなく、自らを罰した。

## 七五三太から新島襄へ～名前の由来～

新島は、1864(元治元)年6月14日(陽暦7月17日)、函館から米船ベルリン号に乗り込み、7月9日、上海でワイルド・ロウヴァー号に乗り換えた。金がない新島は船長テイラーの給仕となって働かねばならなかった。そのときテイラー船長は「I shall call your name Joe」といい、ここにジョー(Joe)という名前が誕生した。

Joeは、Joseph(ヨセフ)のつづまった名前である。新島はこの時にその名前の意味を知る由もなかったが、後にこのヨセフという人物が、旧約聖書の創世記30章以下に記されている神の民イスラエルをエジプト(外国)にいて、自分の民族を救う人物の名前であることを知り、自覚的に自らの使命を自覚してその名を受け止め、「襄」という当て字を用いた。最初は「譲」という字を用いたことも、漢訳聖書の「ヨセフ」を当てて「約瑟」としていたこともあったが、後に「ジョウ」とした。

## 『同志社大学設立の要約』(1888)

新島襄が大学設立の宿志を全国の人民有志にむかって訴えた文章である。一時、大学の名前を「明治専門学校」とする案も浮上したが、徳富蘇峰の意見もあって、当初からの「同志社大学」と決定した

### 「人民の手に抛る」

新島襄は維新革命によって新しい国になった日本には、「人民の手に抛る」大学が必要である。現代風にいえば教育権は親にあるもので、国家にあるのではないことを日本人に教えようとした。

### 「活ける力ある基督教主義」

私立大学は、儒教風徳育ではなく、「活ける力ある基督教主義」道徳に基づく。生徒に期待したのは、一言でいえば、自分が自分の主人公である自由人、自分の人生を自分で作為し、しかも見識をそなえて世の中に活動する人物に、未来の日本を託そうとしたのである。

「キリスト教主義」なればこそ自分が自分の主人公である人間「良心を手腕に」用いる人物が育つのであり、その下でこそ「文明」は進み「近代国家」としての日本も形成される。明治日本に今必要なのはそのような大学であり、「一国の良心とも言うべき人々を養成」するために、キリスト教主義による同志社大学の設立した。